〔研究ノート〕

若者の性役割観の構造とライフコース観および結婚観

中井　美樹*

現代女性の特徴は性役割意識のうえでの平等志向であるとも言われ，これが社会変動の促進要因となっているとも考えられている。しかし，性役割観が現実の行動に与える影響については，実証研究によって一貫した明瞭な関連が見いだされているとは言い難い。本稿の目的は，青年期女性のライフコース観が実際に性役割観によってどのように規定されているのか，さらに結婚観はいかに規定されているのかを明らかにすることである。464人の大学生データに基づき，まず性役割観の構造を提示する。次に性役割観が若者のライフコース観や結婚観を規定するメカニズムを構造方程式モデルにより検証する。

キーワード：性役割観，ライフコース観，結婚観，構造方程式モデル，キャリアプラン

1．研究の目的

1.1　性別役割観をめぐる今日的状況と研究の目的

女性のライフスタイルの多様性に注目が集まるのに伴って，多様な価値志向を持つ女性の存在を前提とすべきであるという議論が，女性内分化といった概念の提出とともに主張されて久しい。また昨今は，晩婚化・少子化が加速するなか，結婚・家族と女性の仕事のあり方に対する考え方が流動化してきたとされている。とりわけ女性の間に，従来の性役割観を疑問視し，社会進出を希求しつつ新しい家族像や結婚観を持つ者が増加している，という見解がさまざまな調査からも浮かび上がってくる。現代の女性の特徴は，平等志向的であり，これが社会変動の促進要因（原動力）となっている，と考えられている。この現れの一つとしての家庭内関係の変化も，近年，興味関心の対象となってきている。

しかしながら，晩婚化・非婚化などの傾向はこのままさらに進むという見方がある一方で，他方では，むしろ現代の若い世代の女性は保守化する傾向にあり，例えば，結婚願望は決して弱くないという見方もある。女性の職場・社会進出が進もうとも，性別格差や伝統的性役割観が簡単に消滅するとも単純には言えない。大きなパラダイムシフトの時代といわれている今日の日本でも，なお，男女という性別により，社会への組み込まれ方が大きく異なり，したがってライフチャンスのあり方も異なる，という現実が，背景として存在する。

現代の若者の性役割観はライフコース観や家庭観・結婚観といかに関連し規定しているのか。本稿の目的は，大学生という青年期女性のデー

＊立命館大学産業社会学部助教授

タ分析を通じて以上の問題の解明を試みることである。大学時代には，成人役割の獲得が進行すると考えられている。同時に，卒業後の進路，キャリアプランやアスピレーションが明確になる時期でもある。性役割観がキャリアプランにいかなる影響を与えるのかを検討することは，今後さらに増加するであろう女子学生の進路選択の問題に取り組む上で意味を持つと考える[1)]。

２．性役割にかんする先行研究

性役割観がここ20年ほどの間に大きく変化し，性別や年齢に関わりなく性別役割分業に否定的になってきたことをうけ，これは単なる時代のイデオロギーの表明で，個人の意志決定に何ら影響を及ぼすわけではないのではないか，といった見方が一方ではある。つまり性役割観の変化は現実の社会の変化に対して意味を持たないのではないか，という見方である。しかし現実には女性内部で多様な層が存在し，分極化，あるいは女性内分化が進行し，複雑な様相をみせているという議論もある。

２.１　性役割観の規定因に関する先行研究

性別役割分業観の女性内変動を生み出す要因の研究においては，学歴や世代，職業経歴との関連などがすでに報告されている（山口，1998；大和，1995など）。すなわち，出身家庭の階層要因として父親の職業的地位が高いほど，また学歴が高く，若い世代ほど平等志向を支持するといった関連が示されている。特に平等志向性と就労との関係については従来多くの研究があり，この一部は鈴木によりまとめられている（鈴木，1999）。

しかしその一方で，性役割観が現実の行動に与える影響については，実証研究によって一貫した明瞭な関連が見いだされているとは言い難い。性別役割観はその「平等志向」に向かう観念的な流れと現実の行動との間に見過ごすことの出来ない不一致が存在することがしばしば指摘され，例えば，性別役割分業を否定し，平等を支持していることがただちに職業志向を意味するわけではないことも最近の研究において示唆されている（山口，1998）。

２.２　性役割概念とその構造および測定

また，性役割観をめぐる研究には，性役割観の概念がいかに定義され，どのような構造かという問題設定からのアプローチもある。大和は，「男は仕事，女は家庭」といった使い古された役割観だけでは，もはや社会の性別役割分業観はとらえきれない，という問題意識から，もっと別の論理で女性が家事育児役割を肯定するような意識をとらえる必要があるとした（大和，1995）。性役割観の構造は一次元かそれとも多次元かといった問いを設定し，潜在構造として二つの次元を仮定した分析を行った結果，９項目の質問から２つの次元（性による役割振り分け・（女性の）愛による再生産役割）を析出している。

性別役割分業観の測定指標は他にもいくつか考案され利用されている。たとえば鈴木は，就労，子育て，家事分担，夫婦関係などの領域を考慮した15指標からなる尺度（鈴木，1999）を提案している。しかしながら，いずれも統一的で決定的な指標ではない。

２.３　問題設定と仮説

２.３.１　問題設定

性役割観の形成プロセスや以上の議論をふま

え，まず第一に，従来の研究で用いられてきた性別役割分業観の指標および青年期の性役割観を捉えるのに有効と考えられる指標によって性役割観を測定し，性役割観の下位概念間の構造を明らかにする[2)]。第二に，性役割観がライフコース観を規定する因果構造を明らかにする。第三に，性役割観からキャリア・ライフコース選択を通じて，さらに結婚観を規定するメカニズムを明らかにする。

2.3.2　仮説モデル

性役割観の構造を分析するのに先立ち，本分析における概念定義を明確にしておく。従来用いられてきた性別役割意識の測定項目は，主に「男は仕事，女は家庭」のような伝統的性別役割分業意識の側面であった。しかし，例えば山口は，性別役割分業への態度においては否定的，すなわち平等支持である女性の中にも，「女性が職業生活を重視するべき」と考える者とそうではない者がいることを明らかにした。さらに，女性のキャリア選択・女性内分化を生み出すうえで，女性の社会進出志向や「成功への恐れ」といった態度がファクターとして深く関与していると考えられてきた。

したがって本分析では，性役割への態度を「性役割観」とし，以下の３つの下位次元を含むものとして包括的に捉えた。下位次元とは，性別役割分業観，社会進出志向，女性性価値の内面化である。性役割観の構造の仮説モデルは図１に示すとおりである。すなわち，いわゆる性別役割分業観（これを「性別役割分業観」とする）とは別個に，女性も社会進出をしてよりリベラルな状態を望ましいとする態度（これを「社会進出志向」とする）の次元，女性性の認知と内面化（これを「女性性価値内面化」とする）の次元が潜在構造としてあると仮定している。性役割観を多次元的に捉えることにより，キャリアプラン選択，ジェンダーの再生産メカニズムをより明らかにできると考える。

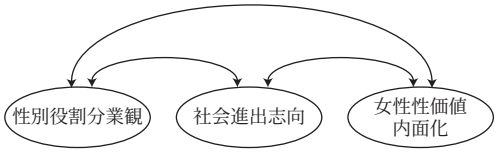

図１　性役割観の多次元（３因子）モデル

次に，性役割の構成概念間およびライフコース観には図２のモデルのような因果プロセスを想定し分析を行う。女性は従来，正面切って異議を唱えたり意見を主張したりすることは長い間タブー視されてきた。こうした態度は性別役割分業についての規範的価値観や社会進出志向の支持といった自身の価値観によって影響されると考えられる。

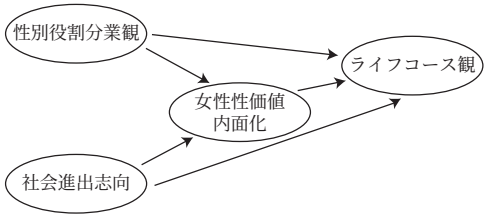

図２　性役割観とライフコース観の仮説因果モデル

ライフコース選択に関わる価値観もまた性別役割分業観や社会進出志向によって規定されるであろう。同時に，「控えめな態度」の内面化を通じてライフコース観が規定されるのではないか。なぜなら，女性として望ましい，いわゆる女らしい恭順な行動をとるよう社会化され，自立への躊躇や成功に対する恐れ（fear of success）といった観念を内面化するほど，自ら自立の機会を回避してしまうと考えられるか

らである。

３．調査の概要と分析方法および変数

3.1　データ

本稿では，1996年11月に立命館大学産業社会学部の女子学生を対象に実施した調査データを用いる。調査の内容は，基礎的事項（所属コース，年齢，出身家庭状況など），大学生活の状況，課外活動，卒業後の進路・職業観，結婚・家族観などに関する項目である。調査の方法は，集合・留置法併用による質問紙調査である。回収有効票数は464人，有効回収率は28％であった[3)]。

3.2　分析方法

分析は先に示した仮説モデルにもとづき，性役割概念の３因子測定モデル，ライフコース観の測定モデルについて，確証的因子分析による分析を行った。さらにライフコース観と結婚観に対する性役割観の影響については，構造方程式モデルによる因果分析を行った。

3.3　変数

分析に用いた概念の測定は，以下のように行っている。

まず，性役割観の測定は，９項目を指標として採用した。それらは表１に示したとおりである。①～④は「性別役割分業観」に関する項目，⑤，⑥は「社会進出志向」，⑦～⑨は「女性性価値内面化」を測る項目と想定している。

また，ライフコース観は，対象者自身が将来どのような生き方をしたいかについての５指標により測定した。それらは表２に示す５項目である[4)]。

４．価値観の構造

4.1　性役割観の構造：測定モデル

性役割観は図１のような３次元を仮定したた

表１　性役割観の質問項目

［性別役割分業観］
①女性は仕事よりも家庭を優先した方がよい
②家庭にとって重要なことの最終決定は夫が行うほうがよい
③男の子は男らしく，女の子は女らしく育てたほうがよい
④デートの費用は，男性が多く払うほうがよい
［女性の社会進出志向］
⑤女性の社長や政治家がもっと増えたほうがよい
⑥妻が外で働き，夫が家事・育児を行う夫婦が増えたほうがよい
［控えめな態度（女性性）の内面化］
⑦男性に面と向かって意見するような態度は女性にはふさわしくない
⑧頭の良い女性であると思われたくない
⑨女性には，男性よりも礼儀やマナーが必要だ

「非常にそう思う」「まあそう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」の５段階評価

表２　ライフコース観の質問項目

①子どもは託児所や保育園にあずけないで自分の手で育てたい
②子どもがいても自分のやりたい仕事をフルタイムで続けたい
③結婚するよりも自分のやりたいことを優先したい
④結婚したら仕事を辞めて，趣味や習い事を楽しみたい
⑤結婚しても独り立ちができるくらいの収入がある仕事がしたい

「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」の４段階評価

め，まず９項目による予備的な探索的因子分析（主因子法，promax回転）を行った。その結果，ほぼ仮説のような３つの因子に分かれることが確認された（結果の提示は省略する）。したがって，これらの項目を性役割観の測定項目とし，共分散構造分析 Amos により３因子測定モデルの構築を行った。これを図３に示す。伝統的な性役割観と，女性の社会進出を肯定する価値観，さらに控えめな女性性価値の内面化とが別次元をなして存在することが確証される[5)]。因子間には有意な相関が存在し，性別役割分業を支持する人ほど女性の社会進出には消極的である，という傾向が読みとれる。また性別役割分業と女性性の内面化は強い正の関連をもち，性別分業を支持する人はまた控えめな態度を受容するようである。

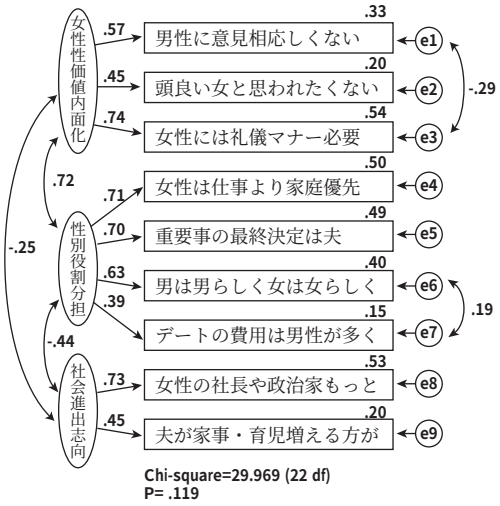

図３　性役割観の測定モデル

4.2　ライフコース観

結婚･出産や家庭生活とのかかわりでみた仕事へのスタンスをライフコース観の主要な側面とした５指標による測定モデルを構築した。結果は図４に示す。係数はすべて５％水準で有意であり，係数の符号から，仕事を続けて経済的自立を志向（－）／家庭的志向（＋）を測定していると考えられる[6)]。

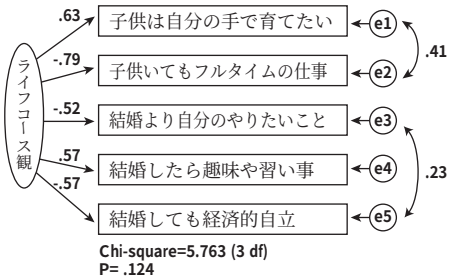

図４　ライフコース観の測定モデル

５．分析結果

5.1　性役割観とライフコース観

本研究での主要仮説は，「伝統的な性役割観を持つ女性ほど，従来，女性的と考えられている恭順な態度や控えめな態度をより強く内面化し，そしてその結果として，職業志向的なワークプランやキャリアパターンを回避する」である。これまで性別役割分業観から女性的価値を媒介としたライフコース選択への影響については明確にされていなかったが，ここではその効

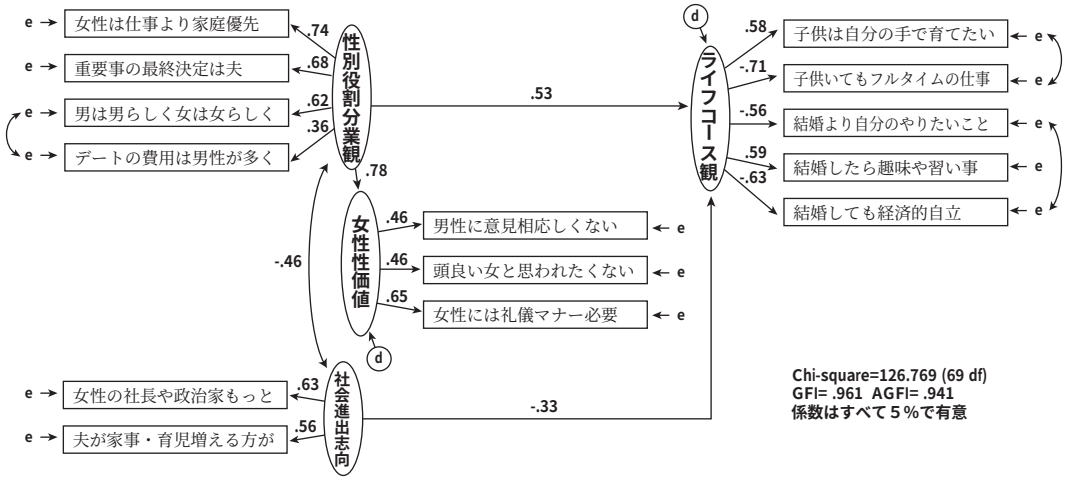

図５　性役割観とライフコース観の因果メカニズム

果を検証した。

初期のモデルにおいて有意ではないパラメータを０に固定し，モデルを修正して得られた結果を図５に示した。主要な分析結果として得られた知見は以下の通りである。

第一に，性役割観のうち，女性は家庭を優先し重要なことは夫が決める，と言った伝統的な役割分業を支持する者ほど，結婚後は家庭志向的なキャリアプランをもつ。一方，女性も今よりももっと社会進出を果たすべきという価値を持つ女性は，逆に，職業志向的なライフコース観を持つ傾向がある。性別役割分業観，社会進出志向価値は，それぞれの価値と一貫したライフコース観に結び付いていることが明らかになった。

性役割観に多次元性を仮定したため，異なる側面からの効果をそれぞれ検証することができた。この結果はまた，性別役割分業に対する価値表明においてこれを否定し平等を支持することが，必ずしもただちに職業志向を意味するわけではない，という知見とも整合的といえる。すなわち，性別役割分業観と相関を持ちながらも別次元として存在する，女性の社会進出への態度がキャリアプランを規定するプロセスが認められる。今よりも女性は社会の主要なポストに進出していった方がよいとまでは考えていない者は，たとえ平等志向であっても経済的自立や職業を自ら志すとは必ずしも言えない。

第二の知見は，性別による役割分業を支持する女性ほど，普段から，女性は控えめにとか頭がよいと思われないような態度をとっているということである。

第三に，女性性の価値からライフコース観への有意な効果は見られなかった。「傑出した行動は避けたい」という態度傾向が，職業的ライフスタイルを避けたり自立の機会から逃げるようにしむけているとは言えない。従来言われてきた，いわゆる「成功への恐れ」が職業世界へ一歩を踏み出す際の足かせとなることはないといえる。

とはいえ，性役割分業観や女性の社会進出支持／不支持の価値側面は，キャリアプラン選択の際の重要な判断基準となっている。

5.2　性役割観，ライフコース観と結婚観

結婚しない，あるいは遅らせる傾向が出生率の低下の主因として問題視され，数多くの実態調査が試みられている（社会保障人口問題研究所，1999など）。それらによれば，男女とも生涯独身志向が増えているわけではないが，年齢へのこだわり－いわゆる適齢期意識が薄らぎ，その反面で結婚相手に望む理想が重視される傾向が強まっている。すなわち，理想の相手を待つ者の比率が増加していることが指摘されている。

では最近の女子学生にとって望ましい結婚観，とりわけ理想の相手とはどのようなものか。今日の女子学生を見る限り，結婚に対して否定的・無関心とはいいがたく，非常に関心が高いという実感がある。にもかかわらず，結婚を先延ばしにする者が少なくないのは，理想との乖離がその原因としてあると考えられる。

理想の結婚相手を問う質問項目は表３に示す７項目である。①～⑤の項目は高学歴や高い職業的地位・経済力など，社会経済的地位（ＳＥＳ）を重視する傾向を測定すると考えている。⑥，⑦の項目は女性である自分自身が仕事をするのに際して理解や協力が得られることを重視する傾向を測定する項目である[7)]。

仮説因果モデルとして，性役割観やライフコース観は理想とする結婚相手像に影響を持つ，と仮定し，このモデルについて分析を行った。結果は図６に示すとおりである[8)]。

理解・協力を重視する結婚観にはライフコース観が有意な効果を持ち，非常に強く規定している。経済的自立やフルタイム継続を自分の生き方として選ぶ女性が望ましいと考える結婚相手像は，やはり仕事への理解や協力が得られる人である。この知見は同時に，ライフコース観が性役割観と結婚観をつなぐ媒介的影響を持つことを示している。また女性の社会進出を支持する性役割観を持つことは，直接，結婚観を規定し，理解や協力を重視するようになる。

結婚相手の社会経済的地位を重視する傾向へは性別役割分業観からの直接の効果が認められ，伝統的な役割分業を支持する女性はエリー

表３　理想の結婚相手の質問項目

あなたが将来結婚するとしたら，結婚相手はどのような人がよいですか。
それぞれあてはまる番号を１つ選んで○をつけて下さい。
［社会経済的地位］
①有名大学を卒業している人がいい
②エリートサラリーマンや社会的地位の高い職業に就いている人がいい
③家柄のいい人がいい
④自分より難しい大学を卒業している人がいい
⑤自分が働かなくてもいいくらいの経済力のある人がいい
［理解・協力］
⑥家事・育児を分担してくれる人がいい
⑦自分が仕事を続けることを認めてくれる人がいい

「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の４段階評価

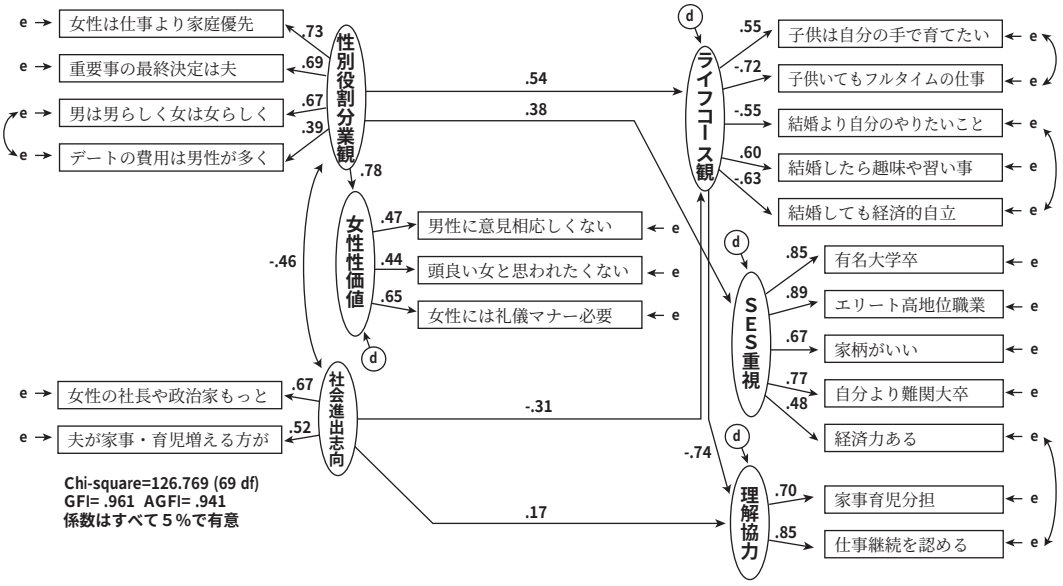

図６　性役割観，ライフコース観と結婚観の因果メカニズム

トであることや経済力を男性に期待している。その一方で，非職業志向ライフコース観を持つゆえに結婚相手に高い社会経済的地位を望む，ということはなく，「（自らのキャリアプランとしては）それほど頑張って働きたいと考えているわけではないから，結婚相手は３高がいい」といった傾向はここからは示されなかった。このあたりの世代間や男女間の意識や価値観のずれが最近の結婚離れ，あるいは結婚を遅れらせる傾向に繋がってきたと考えられるが，こうした問題についてはさらなる検討が必要である。とはいえ，今後も，平等を志向し結婚後も経済的自立を志向する女性が確実に増えると考えられる。そのうえ，ますます適齢期意識が薄らぎ，結婚相手に望む理想が重視される傾向にあるとすれば，仕事への理解や協力を望ましいとする理想と，現実とのギャップがある限り，晩婚化はそう簡単には解消しないとも考えられる。

６．結論と考察

本研究では，多次元構造を持つと考えられる性役割観の諸側面とライフコース観の因果メカニズムを検討し，キャリアプランを認識する重要な時期においてこれに関与する要因について明らかにすることができた。分析の結果，性別役割分業観や女性の社会進出に対して抱く態度が，自身のキャリアプランに影響すること，職業志向的なキャリアプランを持つ女性は，結婚相手から仕事への理解や協力が得られることを重視することなどが明らかになった。ただし，女性性の内面化は，本分析の結果からは必ずしもライフコース観を規定する際の媒介要因とはなっていない。また性役割観を多次元的に捉えることにより，結婚観を規定する性役割の異なる側面の影響も明らかになった。

分析からは，通常，性別役割分業意識と関連が見られるといわれている階層要因との明瞭な関連は必ずしもみとめられなかった。この点に

関しては，対象学生の出身層の分散があまり大きくないためか，対象者が限定された者であったためとも考えられる。対象者が女子大学生という層であるため，知見を一般化できるようなデータの追求が課題である。

女子大学生（とその卒業生）を対象とする意識・実態調査研究は，青年期研究や，女性の高等教育についての研究の中でこれまで蓄積されてきた。今後，これらとあわせて検討することによって，現代女性の生き方を複数の側面から捉える研究がより一層深まると考える。

付記：本稿は，1996年度立命館大学産業社会学会の研究助成（「女子学生生活実態調査研究－現代の女子高等教育の意味と機能に関する実証的研究－」）をうけて進められた研究成果の一部である。

注

1）学生時もしくは最終学校卒業時のワークプランや望ましいと考えるキャリアパターンは，その後のライフコース選択に影響力を持つ，という指摘が従来なされている（Brinton,1989など）。しかしながらこうした指摘は主としてキャリア形成途上の女性の回顧データにもとづいている。

2）本研究では，対象者が大学生というように若年層でもあり，したがって質問する性役割観の項目の作成にあたり，性別役割の流動化や社会の新たな方向性をもふまえた，やや広い項目を含んでいる。

3）調査の内容および結果の詳細については調査報告書を参照のこと（立命館大学産業社会学部女子学生委員会，1997）。

4）ライフコース観の５項目に対する回答分布は，以下の図７に示すとおりである。

5）ここではモデルのフィットをよくするため，誤差間の相関を認めた。

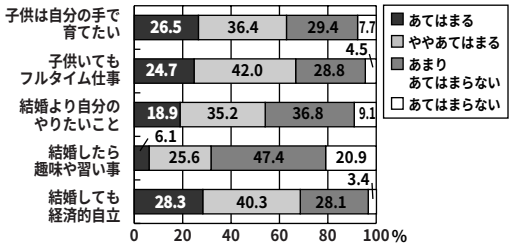

図７　ライフコース観

6）このモデルでは，ライフコース観について「仕事か家庭か」という二項対立的な構造を仮定している。しかしながら，仕事も家庭も（子供も）などという，より多様な層も存在するため，今後，さらに異なるモデルを想定した分析による検討が課題である。

7）望ましい結婚相手の７項目に対する回答分布は，以下の図８に示すとおりである。

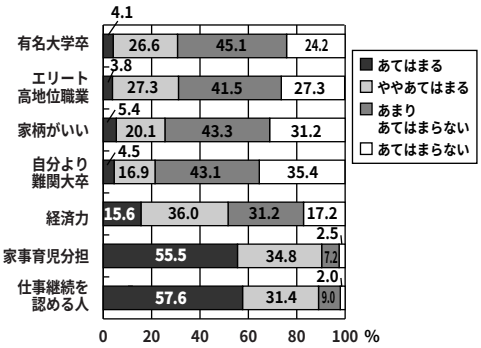

図８　望ましい結婚相手

8）ただしこのモデルに関しては，まだ暫定的なものでありフィットもまだ不十分であるため，さらに仮説の修正やモデルの修正が必要と思われるため，仮の（tentativeな）結論である。

参考文献

Brinton,M.C.,1989,"Gender Stratification in Contemporary Urban Japan."*American Sociological Review*,54:549-564.

国立社会保障・人口問題研究所 1999 『独身青年層の結婚観と子供観』国立社会保障・人口問題研究所.

中西祐子 1998『ジェンダー・トラック』東洋館出版社.

立命館大学産業社会学部女子学生委員会 1997 『女子

学生生活実態調査報告書』立命館大学産業社会学部女子学生委員会.

鈴木淳子 1997 『性役割－比較文化の視点から－』垣内出版.

鈴木淳子1999「高学歴夫婦における性役割態度の関係－就労とのかかわりに関する社会心理学的考察－」『理論と方法』Vol.14,No.1:35-50頁.

山口一男　1998「女性における性別役割意識と社会階層，職歴，ライフスタイルとの関連」（1995年ＳＳＭ調査シリーズ　3）1995年ＳＳＭ調査研究会，123-155頁.

大和礼子 1995「性別役割分業意識の二つの次元－「性による役割振り分け」と「愛による再生産役割」－」『ソシオロジ』第40巻１号，109-126頁.

Gender-Role Attitudes and Young Women's Career Socialization

Miki NAKAI＊

Abstract: Previous studies provide inconsistent evidence regarding the relationship between gender-role attitudes and women's career plans. The purpose of this study is to clarify the concept of gender-roIe attitudes and to examine the impact of gender-role attitudes on career aspirations and marital plans, by using the structural equation model. Data from 464 female respondents are used to prove a three-dimensional model of gender-role attitudes and specify the causality. Women who have conservative attitudes toward gender have family-oriented lifestyles, whereas women who support the entry of women into the professional world have work-oriented lifestyles. Work-oriented women value not socioeconomic status but the understanding and help of partners.

Key words: gender-role attitudes, career plan, marital plan, work-oriented lifestyle, structural equation model.

＊Associate Professor of the Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University